

平成28年度 前期日程 小論文
出題の意図と解答の傾向

問題 1

【出題の意図】

問題 1 は、鳥越皓之『「サザエさん」的コミュニティの法則』（2008 年、NHK 出版）から出題した。問題文において著者は、柳田國男の旧制高等学校生へ向けた講演「平凡と非凡」を手掛かりに、現代社会における教育が、子どもたちに優劣をつける競争教育（柳田のいう「非凡教育」）に偏重していることを問題視している。そのうえで、従来コミュニティが担ってきた、生きてゆくための知恵の伝授（柳田のいう「平凡教育」）が、子どもたちにとって不可欠であると論じている。こうした著者の議論をうけて、競争教育の環境にさらされてきた受験生たちが、これからの教育に対して何を考えるのかを問うた。この問題において受験生に求めたのは、①問題文の内容を正確に読み取る読解力、②読み解いた内容を整理して文章化する作文力、③著者の議論に対し的確な見解をのべる論理的思考力の 3 点である。

設問 1 における解答のポイントは、①問題文全体の内容を正確に読み取ることができたか、②読み取った内容を整理してわかりやすく記述することができたかの 2 点である。問題文の各所にある平凡教育と非凡教育に関する記述の断片をもとに、両者の特徴を上手く整理してくれることを期待した。具体的には、それぞれの教育の内容やそれを担う主体等について示すことである。

設問 2 は、①問題文の内容について正確に理解したうえで、②そこで示された考えに対して自分なりの見解を上手く述べるのがポイントであった。非凡教育と平凡教育のどちらが優れているのかを問うているわけではないので、多様な解答がありうるが、自分の見解を述べる際には、その根拠を述べていなければならない。

【解答の傾向】

設問 1 は、おおむね正しい説明ができていた。ただし、平凡教育の重要な特徴である「みんなが同等の知識をマスターする」という点を書き落としているものや、それぞれの教育を担う主体について記述がないもの、上手く整理して記述できていないもの等が一部にあった。

設問 2 でおおむね正しい解答ができていたのは、筆者が非凡教育への偏りを問題視している理由についてであった。ただし、著者の主張と柳田の主張を混同している解答や、著者の主張をまとめずに自分の考えのみを論じている答案も散見された。

現代における非凡教育への偏りをどう考えるかについては、平凡教育の比重

を高めるべきとする意見から、より非凡教育の強化を推し進めるべきという意見まで、様々な立場の答案があった。その意見の根拠については、問題文の中から根拠を示すだけでなく、自分のまわりの卑近な例をあげて説明しているケースも多かった。しかし、そうした解答は主観的な印象論にとどまっているものがほとんどで、普遍的で客観性を帯びた説明にまで至っていないのが残念であった。

最後に設問 1・2 の解答の傾向を通じて、留意してもらいたい点をいくつか示しておく。言うまでもなく、誤字脱字のある解答や文字数が少なすぎる解答では、高得点は望めない。また、作文における技術的な不備にも注意すべきことがある。主語と述語の不一致、「である」調と「です・ます」調の混在、不適切な接続詞の使用、一文が非常に長いといったものは、解答者の主張を正しく採点者に伝えることができない。

問題 2

【出題の意図】

問題 2 は、生活習慣病と生活習慣の動向を示す資料をもとに、グラフの諸数値の変化や比較の読み取りを通して両者の関係を認識し、その上で生活習慣病の予防対策を述べてもらうことを目的としたものである。社会科学系の論述問題では、「少子高齢化」や「若者の雇用」等の社会問題に関する出題が多く見られるが、今回の出題では「生活習慣」という身近で日常的な題材を用いた。それは出題問題に関する予備知識よりも、図表問題本来の意図であるグラフ数値の読解力を重視したいがためである。

設問 1 は、脳血管疾患と糖尿病の推定患者数の時系列推移と、運動習慣と喫煙習慣の時系列推移を提示し、推定患者数の推移の特徴と生活習慣との関係を問うたものである。諸数値の変化の特徴を見極めることが解答のポイントである。

設問 2 では、平成 7 年と平成 25 年の運動習慣者、喫煙習慣者および肥満者の割合を提示し、年度比較から生活習慣の改善あるいは悪化を読み取り、その上で生活習慣病予防の観点から諸問題の指摘とそれらの改善策を問うたものである。年度比較から諸数値の変化幅を認識することが解答のポイントである。

【解答の傾向】

設問 1 の解答傾向は、次のようなものである。時系列変化では両推定患者数の増加傾向が止んだ平成 8 年に注目し、その前後の動きを論ずるという解答が多くを占め、ほぼ出題の意図に合致していた。しかし、脳血管疾患については平成 8 年前後の動きを指摘しながら、糖尿病患者については年度比較、例えば昭和 55 年と平成 23 年の数値を比較している解答も少なからずあった。

推定患者数と両生活習慣との推移の関係では、論述の仕方は様々であったが、運動習慣とは負の相関、喫煙習慣とは正の相関を含意した内容の解答が多く、出題の意図に合致していた。糖尿病患者数の年度比較を行った解答には、生活習慣病に対してグラフに提示されていない別の要因の重要性を指摘するものが散見された。このような解答の中には、「グラフ数値の間にどのような関係が見いだされるか」という設問から逸脱しているものもあった。

単純なケアレスミスで、脳血管疾患患者数の系列と糖尿病患者数の系列を取り違えて論述する解答も散見された。また主語を落としてどちらの患者数について述べているのか不明な解答もあった。各年の脳血管疾患と糖尿病の推定患者数同士を比較検討している解答も散見された。軸に年が示されているにも関わらず、「最近」「近年」「以前」「昔」という言葉を用いて指摘すべき時点を曖昧にした解答もかなりあった。

設問 2 では、三つのグラフの総数の比較から、運動習慣と喫煙習慣は改善されたが肥満は改善されず、食習慣に問題があると指摘している解答が多くあった。そして年度比較の割合変化を踏まえたうえで年代比較を行い、就業や育児にたずさわる年代層の生活習慣の改善がはかどっていないという指摘をしているものが多くを占めて、出題の意図に合致していた。ただし、「諸問題を指摘せよ」という設問に対して、どちらか一方のみを取り上げている解答がかなりあった。

三つのグラフの数値を総合的に分析せずに、各グラフそれぞれの年度数値の動きの特徴だけを述べているものも多かった。このような解答は、問題の指摘が明示されておらず、対策についての論述から、ようやく何を問題としているのかを推測できるといったものであった。年度比較を行わずに、平成 25 年の数値のみを取り上げて諸問題を指摘している解答も散見された。

対策の論述についての全体的な傾向は、様々な経済主体による実現可能な施策を挙げているものと、個々人の健康管理についての心構えを記述しているものとに分かれた。また、「残業を少なくする」「会社に運動ジムを造る」といった個別対策を書き連ねるものと、これらを抽象化した言葉を用いて、より広い施策まで表現したものがあった。「ワークライフバランスの適正化」「企業による運動環境の整備」といったある程度抽象的な言葉を用いた上で個別対策事例まで記したものは、その多くが明瞭で過不足のない論述となっていた。

最後に全体の解答傾向からみた留意点を述べる。それは、設問をよく読むということである。設問 1 の前半では「推移の特徴的な動きを指摘せよ」とあり、後半では「どのような関係が見いだされるか」とあり、そして設問 2 では「諸問題を指摘せよ」とある。極端に言えばそれぞれの論述には「特徴的な動きは～である」「～という関係が見いだされる」、そして「問題は～である」という

文言があっても然るべきである。ところが解答の多くにこのような文言は見られなかった。何を説明しようとしているのか、その意図が見えにくく、あいまいな論述になりがちだった。設問をよく読み、解答中にそれを繰り返し確認することは、適切な論述を行うために欠かせないことであり、グラフ数値の読み取りにも役立つはずである。